第170号　平成22年4月5日発行（隔月刊）年6回偶数月5日発行　1998年3月20日第3種郵便物認可　ISSN0910-1950

デザインの現場
DESIGNERS' WORKSHOP

隔月刊
vol.27 no.170
2010 4 Apr.

デザインを支える職人

デザイン現場の職人

深澤直人　現代のものづくり
田中一光を支えた人々
エンツォ・マーリ

全国職人ワークショップ・地場産マップ

印刷／製本／模型／用紙開発
製版／活版／レタッチ／会場施工
タイポグラフィ／什器製作／アクリル
美術製作／メリヤス／合板／家具
ホウロウ／南部鉄／漆／ガラス
建具／カーボン素材／和紙
エポキシ樹脂／イス張り etc.

特別記事
セキユリヲ in Sweden
キルト工芸の挑戦

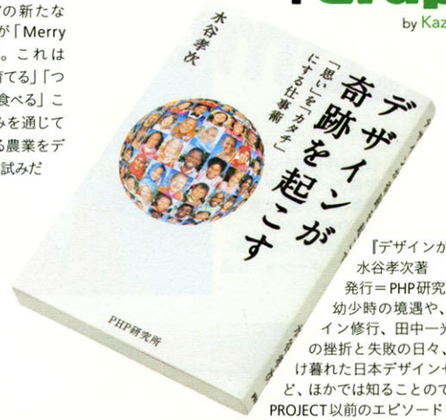
求人情報サイトOPEN!
www.bijutsu.co.jp/dezagen

Designers' Workshop no.170
デザインの現場 2010 4 Apr.
特集 デザインを支える職人
スウェーデンのセキユリヲ 深澤直人／エンツォ・マーリ
美術出版社　定価1,890円　本体1,800円
BIJUTSU SHUPPAN SHA
デザインの現場・一七〇号・二〇一〇年四月五日発行（年六回隔月一回・偶数月五日発行）平成一〇年三月二〇日第三種郵便物認可
発行・株式会社美術出版社　東京都千代田区神田神保町一―三―十八　〒一〇一―八四一七　電話(三三三五)五一三六営業・(三三三四)〇五四五編集

:Graphic
by Kazutomo Ryuko

農業をデザインするMERRYの新たな取り組みが「Merry Farming」。これは「知る」「育てる」「つながる」「食べる」ことの楽しみを通じて笑顔になる農業をデザインする試みだ

「Merry in KOBE 2002」（新長田南再開発工事仮囲い）。阪神淡路大震災から7年後の神戸を訪れて制作した、水谷の初のソーシャルワーク。商業主義から社会的・文化的なことへと意識が向かいだした最初の仕事だ



『デザインが奇跡を起こす』
水谷孝次著
発行＝PHP研究所　1470円
幼少時の境遇や、上京後のデザイン修行、田中一光デザイン室での挫折と失敗の日々、プレゼンに明け暮れた日本デザインセンター時代など、ほかでは知ることのできないMERRY PROJECT以前のエピソードも多数収録

水谷が撮りためてきた世界中の子どもの笑顔が演出に使用された2008年北京オリンピックの開会式。開会式の演出を務めた映画監督チャン・イーモウとの直談判をはじめ、数多の困難を情熱で乗り切ったエピソードについても本書で触れられている

次世代のデザインのヒントが見つかる
水谷孝次『デザインが奇跡を起こす』

アートディレクター、水谷孝次の著書『デザインが奇跡を起こす』（PHP研究所）がリリースされた。本書は、水谷の自伝的側面の強い一冊だ。幼い頃の境遇にはじまり、一流アートディレクターの座を射止めるまでの足取り、さらには「MERRY PROJECT」へと突き動かされるまでを時系列で追っている。MERRY PROJECTといえば、水谷がカメラを手に世界中を飛び回り、子供の笑顔を撮影してきたプロジェクト。それが農業や街のクリーンナップにも派生したことで「デザイナーなのになぜ？」という声も聞かれるようになった。確かに活動の表層だけを追っていては、水谷のデザインの本質は見えてこない。水谷のデザインは文字や写真を配置するといった表面的な行為ではないからだ。

「僕にとってのデザインとは、人を幸せにする行為。人に勇気、希望を与え、平和を実現するもの。亀倉雄策先生、田中一光先生の時代は、デザイナーの活躍で日本を元気にしたり、オリンピックを支えたりと、デザインが社会状況と密接につながっていました。資本主義が行き詰まりを見せる今、人や地球全体をもっと幸せにするには、いろんなことをデザインし直す必要があると思います」

いうなれば、これは「ソーシャルデザイン」だ。確かに企業の営利活動に貢献するだけがデザインではない。とはいえ、かつての水谷もバブルの頃までは、その舞台で活躍した一人だった。そんな水谷をソーシャルデザインに駆り立てた理由は本書に詳しいが、根本的な理由は幼き頃の体験にある。戦争で耳に障害を負い、家庭に影を落とした父の存在だ。

「父を変えてしまった戦争や世の中は間違っている、だから僕がデザインで世の中を変えよう、と思っていたのに、次々と舞い込んでくる仕事をこなし名声と富を求めていた。結果、預金残高はビックリするような数字になったのに、疲れ果てて幸せはなにも感じなかった」

小さな仕事でもいい、人を幸せにして満足できる仕事がしたい。そう思い、積み重ねてきたキャリアを捨てたのが40代半ばの頃。以後、その信念を貫き続けてこれたのは、デザインの可能性にかける情熱があってこそ。「〇〇はデザインだ」を口癖とする水谷にとって、デザインとは「意匠」ではなく「設計」の意味あいだ。文脈によっては企画、プロデュース、マネジメントともいい換えられる。それは水谷にとって人を幸せにする行為すべてのこと。被災地で塞ぎ込む子どもから笑顔を引き出すこともデザインなら、街をクリーンナップして笑顔を生み出すこともデザイン。デザインするものは、いつでも幸せな気持ちだ。

「今や広告や紙媒体には元気がないけれど、僕のようにデザインをとらえていれば、まだまだチャンスはあります。デザインが必要とされる場所はたくさん残されていますからね」

来年には還暦を迎えるベテランに引退の二文字はない。むしろその挑戦は五合目あたりか。本書の帯には「思ったら飛べ」とあるが、その言葉の通り、デザインにかける情熱や、デザインの可能性といった、熱い思いを忘れかけたときに、ぜひ紐解いてほしい一冊だ。

立古和智　編集者・ライター。フリッジ代表。クリエイター関係の取材記事を多く手がける。www.fridge.co.jp